

道を切り開くこと

自閉症を克服したある子供の記録

キャリン・セルーシ

自閉症の初期の症状についてもっと多くの情報があれば...と思います。
私の書く文章は、「振り返ってみると」や「今にして思えば」などで始まる事が実に多いものです。これは自閉症の子供を持つ親にはよくありがちなことです。

最初からマイルスが自閉症である事がわかったとしても、小児科医からは役に立つアドバイスを受けることは出来なかったでしょう。原因が理解され始めたばかりの変遷期にある疾患とはこうゆうものです。私のところに歩み寄り、マイルスの初期の発育の違いは、「食事を変えることで治療できる」と知らせてくれる人など誰一人としていませんでした。食事ですって?! 誰がそのようなことを信じたのでしょうか?

1993年の12月に息子のマイルスは生まれたのですが、彼は気難しい赤ちゃんでした。よく泣くわけではないのですが、不機嫌で気まぐれでした。マイルスは毎日やることに慣れることはなく、口から良く物を吐き出すため、お乳を飲ませた後、私は何度もシャツを取り替えなくてははいけませんでした。

又、疲れているときに抱っこをされるのを嫌がり、泣き疲れて眠る方を好みました。いつも目を覚ますか私たちは見当もつかず、30分、2時間、4時間、運がよければそれ以上眠ってくれました。これが数ヶ月間続きました。

はじめの12週間は我慢して母乳を与えていましたが、その後は乳幼児の豆乳に切り替えました。小児科医は私が豆乳を選んだことに驚いたようでした。家族にいろんなアレルギーがいることを話すと、その小児科医は「あなたがそう言うなら・・・」といているような顔つきでした。少しバツの悪い思いをしたことを記憶していますが、牛乳がアレルギー(アレルギーを起こす物質)である事が多いことは知っていたので、とにかくやってみるべきでしょう?

マイルスの状態は豆乳でよくなりましたが夜は相変わらずひどいものでした。マイルスは社会性や言語の発達は生後1年くらいは通常でそれから後退していく典型的な自閉症児でしたので、私たちは睡眠不足以上に大きな問題に直面することなど知る由もありませんでした。

生後11ヶ月で息子は歩き始めようとしていました。「ねこ」や「さかな」という言葉も言う事ができ、いないいないばーをするのが好きでした。私たちが一緒に遊ぶと微笑んでくれ、「バイバイ」と手を振ったり、手をたたいたりしました。

生後 12 ヶ月になろうとするとき、担当医の勧めで牛乳を与え始め、何の変化もないように見えました。しかしその後、中耳炎に続けざまにかかるようになりました。最初の中耳炎は、頭皮や顔、首に発疹を伴いました。担当医に再び見てもらいました。ウイルス性の何か？それともバラ疹？担当医はマイルスに抗生物質を投与し、柔軟仕上げ剤を使用しないようにと言いました。担当医に対する私の信用が薄れ始めたのはこのときです。発疹とともに熱もありました。この時点で牛乳が関係しているかもしれないということは思いつきませんでした。洗濯の柔軟仕上げ剤の問題でないことはわかっていました。中耳炎の再発を予防するためのアモキシシリンが投与された数ヶ月間、マイルスの頬の紅潮は出たり治まったりを繰り返しました。

親と言うものは、たとえ子供が言葉に表すことは出来なくても、何かがおかしい時にそれに気づくものです。子供が言葉を習得するとき、その進歩は革新的なはず。マイルスが生後 15 ヶ月の時、耳にチューブが入れられたその日、待合室の水槽を見ながら「さかな」という言葉を使ったのが最後になりました。マイルスの言葉は、「飛躍的に増えていく」と言う耳鼻咽喉科医の確信とは裏腹に、1 ヶ月後には、手も叩かなくなり、バイバイもしなくなりました。ますます彼は聴覚障害があるように見えました。

ある日、仕事から遅く帰ってきた疲れもあって、私は小児科の担当医の前で泣き始めました。私が心配していることを担当医が真剣に取り合ってくれているとは思えないと言いました。私は、自分たちの生活を混乱させているこの絶え間ない病気の原因を知る必要がありました。担当医は、皮肉たっぷりに「子育ては時折私たち医者勤務時間も気にしませんからね」といったのです。私は即座に親として今までで一番賢い方法をとりました。息子を抱きかかえて、新しい医者を探したのです。

新しく見つけた小児科医は、発達遅延についてあまり多くを知らなかったが、その担当医は、息子に何が起きているのかを調べる手助けをしてくれることに同意してくれました。担当医の言う「慢性の非特異型の下痢」をのぞいて、マイルスは身体的には健常でしたが、風変わりな子供でした。ある特定の行動に対しては長時間集中し、人と関わる事は拒否しました。自閉症の症状に無知であった私は、マイルスを「自分の世界に浸る子」と説明していました。私は、マイルスには表出言語や受容言語さえもないのではないかという不安を再び口に表しました。マイルスがこの世で一番気に入っていた「コップ」という言葉をわかっていないことに気づいたのです。実はマイルスは牛乳を沢山飲んでいました。経済的な理由から、飲む量を 1 日に 70 オンス（約 2 リットル）に制限していましたが、担当医は、マイルスが覚えていた言葉がわからなくなったことを懸念していました。そして、言語病理学者と児童心理学者を紹介してくれました。

1995年7月12日の真夜中、私は緊急治療室にいました。マイルスは、三種混合の予防接種を受けたわずか18時間後に高熱と発熱性の発作を起こしたのです。これは予防接種と関係していたのでしょうか？医師たちにもわかりませんでした。マイルスは2時間叫び続けた疲れから、私の腕の中で弱々しく横たわり、私の目をじっと、じっと見つめていました。そんなマイルスを見て驚きました。彼が始めて私を認識しているようだったからです。これはなぜなの？・・・マイルスが私をじっと見るのが普通でないと感じていること自体がおかしいことに気づきました。彼はいつから目を合わせなくなっていたのでしょうか？

生後19ヶ月のとき、マイルスは発達小児科の診察を受けました。マイルスの病名、「自閉症」という言葉がそこにありました。診断の恐るべき真実がわかり始めました。マイルスは、砂場に45分ずっと座ったまま、同じコップに砂を何度も流し入れたり、おもちゃをくっつけては離したりを繰り返していました。何か物を指さしたり、オモチャを見せるために私たちに持ってきたりすることなどは決してしませんでした。

私たちの生活はどうにもならず、空回りしているように思え始めました。夫と私がこの診断の意味することに気づいたとき、私たちは愕然としました。

その後、私はある子供が牛乳アレルギーの為に間違っ​​て自閉症と診断された記事をどこかで読みました。その子の母親、メアリー・キャラハンはこれを本に記し、この症状を「脳アレルギー」と説明していました。私は懐疑的でしたが、図書館に行ってアレルギーに関する本を探し、中耳炎と牛乳が関連する可能性が記されている本を見つけ出したのです。その本にはたとえ牛乳アレルギーであっても牛乳をほしがる子供がいることも書かれていました。そのとき、義理の母が思い出させてくれたのですが、夫は3歳のときミルク製品を摂るのをやめたあとに話をし始めたのでした。

ある朝、私は図書館から借りてきたドリス・ラップの『Is This Your Child?』という本を読み終え、夫のアランの仕事場に電話をしました。

「ねえ、まだ豆乳ある？最後の缶まで使ってしまったかしら？」

マイルスが生後20ヶ月のときに、彼の食事から乳製品を取り除きました。

驚いたことに、マイルスは豆乳とスーパーで私が見つけた米乳を受け入れました。何が起こるか想像もつきませんでした。この変更による誤った反応は起こりませんでした。1日目の夜、いつもの泣き叫ぶ声は疲れたすすり泣きに変わりました。そして翌日、

私たちは、初めて、マイルスが部屋で遊んでいる音で目が覚めたのです。その日、号泣する事がかなり減り、1ヶ月後には前よりも良く目を合わせるようになりました。聞きなれない赤ちゃん言葉を聴いたとき、私たちはマイルスが以前いかに声を出していなかったかに気づきました。マイルスのベビーシッターにはその変化のわけをすぐには言いませんでしたが、彼女はマイルスのその違いにはっきり気づきました。

3日目にアランが仕事から帰ってきたとき、彼は「Ring Around The Rosy」(かごめかごめのような遊び)の遊びにマイルスがしぶしぶですが加わっているのを見て、こう宣言しました。マイルスはもう乳製品を摂らない。牛乳、バター、カゼイン、乳清、もういらない。

発達小児科医は、マイルスが牛乳を飲むのをやめてから、2週間、症状が改善したと私たちが夢中で話すのをじっと聞いてくれました。先生は、息子の状態がある部分よくなってきていることを認めた上で、私たちに積極的な治療を探すことを勧めました。とはいっても、彼女のマイルスに対する診断はやはり自閉症でした。後に私たちは、先生が「風変わりな」両親や研究者たちから牛乳と自閉症の関連性についてそれまでに聞いた事があった事を知るわけですが、この時先生は何も言いませんでした。私の夫は科学の分野で博士号を持つ研究科学者ということもあり、先生は私たちの言う事を真剣に聞いてくれていました。先生は、その食事が良いようならば、続けても問題ないでしょう と言ってくれました。

生後21ヶ月の時、マイルスが昼寝のまえに豆乳を飲むと、目覚めた後は不機嫌で、数秒間身震いする事に気づきました。それから米乳だけを飲ませるようにしました。当時、私たちは、注意深く私の意見を聞いてくれる神経科医にかかっている、牛乳や大豆をマイルスに与えてみて、そのときの行動の変化をビデオに撮る事ができるかと尋ねられました。その神経科医はマイルスを観察して、マイルスが自閉症と診断されていたことに驚いたようで、元々の診断について懐疑的でした。私にはなぜだかわかりました。マイルスの症状が特に特に社会的な係わり合いの部分で非常に改善していたからです。けれども私は、神経科医が要望したことやマイルスに牛乳を与えることは出来ませんでした。私たちが目にしている事が何だかわかっていましたし、私たちにとっては彼の進歩が何よりも重要であったのです。

家庭内での行動療法を取り入れたところ、マイルスの反応は良く、週に4日、午前中に特別保育所に通い始めるようになりました。私たちは、これらが自閉症からの回復の要素であることに同意していましたが、マイルスが牛乳を飲んでいれば、これほど効果的

ではなかったという事をわかっていました。

1ヶ月間で、マイルスはすぐに運動技能の評価で6ヶ月以上の成長を見せ、CARS値(自閉症のレベルを示す数値)の点数も下がり、自閉的行動の減少が示されました。マイルスはすぐに正確な自発的言語や社会性を身に付け、目を合わせることもほぼ普通に出来るようになり、名前を覚えようとするものを指差し、私たちのところに物を持ってきて分けたり、新しい行動のきっかけを見つけ出すために注意深くお姉さんを観察したりしました。

私たちは共感してくれるアレルギー専門医を探しました。自閉症児を持つ保護者の方たちが、標準的なアレルギー性の免疫系反応がなくても、特定の子供に影響を及ぼす食物がある事を認めているアレルギー専門医を教えてくださいました。そのアレルギー専門医は、幾分助けになってくれました。マイルスはいくつかのカビの菌種に反応しましたが、食物では卵、コーン、小麦、大豆、オート麦、魚などに対して、わずかに反応があっただけでした。牛乳や米には反応しませんでした。私は驚きました。マイルスは牛乳アレルギーでないのなら、なぜ牛乳であんな問題が起こるのでしょうか？

その医師は、アレルギーにも2種類あるという考えを説明してくれました。

1つは、じんま疹や腫れ物が出来たり、呼吸困難がよくあるアレルギー反応であると。私の甥っ子はピーナッツにアレルギーがあり、姉はエピペン(重度のアレルギー反応が出たときに注射をするエピネフリンという薬の注射キット)をいつでも持っていなければならないことを思い出しました。もう一つのアレルギーとは、免疫系の違う部分が影響を受けるようで、そのようなアレルゲンに対する反応には、頭痛、下痢、失見当識、易刺激性またうつ病や多動さえもあるということでした。このアレルギー専門医は、回転食事法をするように勧めました。

この回転食事法というのは、アレルギーを起こす食物を4日に一度くらいは食べさせる事ができ、毎日食べる場合より反応は小さくなると原則に基づきます。また、3日間その食物を摂らなかつたら、それを食べたときのアレルギー反応がよりはっきりわかります。

私はコンピューターの前に座り、マイルスが食べる数少ない食品リストから、1週間のスケジュールを書き上げました。

回転食事療法をしている時に、マイルスがもう完全に大豆に対して耐性がないことに気づきました。中華料理では(醤油の為)じんま疹を引き起こし、豆乳はひどいおむつかぶれの原因となりました。また、コーンはどんな種類であれ、マイルスの下痢を悪化さ

せる事がわかりました。柑橘類やブドウ、そしてほとんどの果物で発疹が出る事をすでに知っていたので（娘も同じ頃にそうだったので）、私たちは食物に対する選択の余地はほとんどありませんでした。挙句の果てに、マイルスは食べ物の歯ごたえを選び好みしました。

しかし、私たちの大きな疑問にはまだ答えが出ていませんでした。食事から乳製品を取り除いた後に、なぜマイルスは自閉症から回復していったのでしょうか？

11月に、カリフォルニアから来た行動療法士にマイルスを見てもらいました。行動療法士は、マイルスが多くの自閉症的特長を持っていること、自閉症のような遅延がある事を認めましたが、マイルスの社交的な行動に困惑していることを打ち明けました。私たちが乳製品について話すと、彼は当惑して、ガラクトース血漿とその他の代謝障害について調べる事を進めました。

私はよりおおくの情報を見つけられることに期待して、モデムを買ってインターネットに接続しました。それから48時間以内に、私は自閉症とカゼイン/グルテンに対する不耐性の情報に衝撃を受けました。私は圧倒されてしまいました。

真剣に話を聞いてもらい、また、マイルスの今までの病歴を他の人たちと共有することは驚くべきものでした。リサ・ルイスのような親やポール・シャトックのような研究者たちが、問題は牛乳や小麦に含まれるタンパク質の不適当な分解がオピエイトのような神経毒素となる事をわかりやすく説明してくれました。ポールはマイルスの食事からグルテンを排除する事を勧めました。グルテンは小麦、オート麦、ライ麦、大麦、に含まれるたんぱく質です。グルテンは、マイルスのお気に入りの食べ物全てに豊富に含まれており、小麦が充填剤として、又は食物がくっつかないようにするためにほとんどの加工食品に含まれている事を発見して、私はおののきました。グルテン除去食を始めるのは一大事でしたが、下痢が治るだけでもやってみる価値はあると思いました。私は、Eメールで、マイルスがもし形のある便をするようになったら、ポールにシャンパンを買うと冗談を言いました。

グルテンの除去を始めたのは、マイルスが生後23ヶ月の11月頃だったと思います。除去食を始めて数日後に、以前食べさせていたライスクリスピーに大麦麦芽が入っているのを知り、「だめだめ」と思ってそれを取り除きました。それから24時間以内にマイルスの便通が正常になっているのを見て驚嘆しました。

マイルスの胃腸科専門医は当惑しました。マイルスは、グルテン・グリアジンの抗体検査を受けていましたがセリアック病の陽性反応は出ていなかったのに、グルテンを除去した後にマイルスの症状が改善したのを見たからでした。胃腸科専門医は、マイルスの

以前のおむつの状態 - 病的な悪臭のする多量の下痢 - も見た事がありました。後にわかったことですが、自閉症の多くの子供がグルテン交代検査で陽性反応を示さないのに、セリアック病のような症状を持ち合わせるそうです。その子供たちが小腸の生検による精密検査を受けると、腸の平らなせん毛とその透過性から、たいていセリアック病と診断されます。

それからすぐに、理由ははっきりとはわかっていなかったのですが、私たちはマイルスに低容量のナイスタチンを与え始めました。私たちの知っている親御さんの一人が、ナイスタチンが彼女の息子に効果的であったことを教えてくれましたが、なぜかははっきりとわかっていませんでした。その薬が安全そうであることを確かめた後、私たちは医師に処方箋を頼みました。この間に、マイルスの『不安定な姿勢』は非常に改善したのです。後に、GPLのショー博士が学会でカンジダの理論について話すのを聞き、理解しましたが、何か腑に落ちませんでした。腸内のバランスが崩れたのはグルテンか酵母菌が原因だったのでしょうか。その答えはわかりませんでした。マイルスはまもなく、2本の足で階段を上がり始め、シーソーに乗ろうともしました。長い間、彼の動きの特徴であった酔っ払いのような歩き方もしなくなったのです。マイルスは、2年以上ナイスタチンを服用し、乳酸菌やビフィズス菌といったプロバイオティクスの摂取も続けました。

数週間後、複数の食物の除去食療法に挑戦しました。これは、マイルスの食事を原因植物でなさそうな数少ない食物に制限するというものでした。鶏肉、キャノーラ油か紅花油を使ったフライドポテト、白米、タピオカ、そして新しい食物が一つずつ加えられました。

私たちはすぐに他の食物、たとえば卵や梨のジュースなどで下痢がおこることを発見しました。身体的もしくは行動的な反応においてそれぞれの食物を最低でも2回テストするまで、マイルスの食事は次のものに限られました。米、ジャガイモ、鶏肉、豚肉、ごま、マカデミアナッツ、テフ（穀草）、クズウコン、タピオカ。除去食療法を始めて2~3ヶ月で、これら以外の食物の除去がそれらの食物に対するマイルスの感受性を高めていることに気づきました。コーンに対する反応は悪く、大豆はさらにひどいものでした。ほんのわずかな量のグルテンでも、顕著な退行と下痢が数日間続きました。

この時点で私たちは異常なほどマイルスの食事に注意を払うようになりました。小麦のパスタの鍋のスプーンを、マイルス用の米のパスタの鍋に落としてしまったときは、米のパスタを全部捨て、もう一度作り直しました。3歳の娘も含めて家族全員がパンを触った後は手を洗うようにしました。マイルス用にトースターは別にし、食器棚も別、そしてパンのくずなどが私たちの手から飛ばないテーブルの一番端にマイルスを座らせました。

友人や親戚たちは、私たちが病的だと思ったかもしれませんが、私たちは今やっている食事療法が、マイルスの回復に100%重要であると信じていました。この食事療法に反応したほかのこの親たちは私たちほど注意深くなかったことも、その子たちの進歩が一様でないことも知っていました。しかし、マイルスは飛躍的に成長していきました。

確信があったわけではないのですが、1日3錠のDMG(ジメルグリシン)も、マイルスの言語機能改善したように思いました。前より幾分かっているようでした。生後28ヶ月のとき、マイルスは3つの言葉を組み合わせて使い始めました。2歳半までは、やや機械的な話しかたでしたが、文が長くなり、より意味のあるもの、例えば「ママ、見て。滑り台があるよ」などを言えるようになりました。マイルスの声は、まだ自閉症の後遺症で、歌を歌うような感じでしたが、マイルスは人と接しようと意欲的でした。

そしてついにマイルスは、18ヶ月だけ年上で、遊び相手をほしがっているお姉ちゃんに気づきました。「動物園」や「人形」、また「恐竜」ごっこなどを一緒にするようになりました。彼の「ごっこ」遊びは、いつも同じシーンの繰り返しからで、肉食の恐竜がみんなを攻撃するところから始まりました。しかし、数ヶ月が過ぎたとき、マイルスは長くてもっと複雑なストーリーを楽しむようになり、ストーリーは毎回変わっていきました。マイルスのアイデアはいろいろありとても面白かったので、ある日、お姉ちゃんが遊びの主導権をマイルスに譲り始めました。

マイルスが3歳になるまでに、もう特別教育を受ける必要が無いと言う評価を得ました。実際に、マイルスの言語は年齢よりも8ヶ月先行したレベルである事がわかりました。「統合」教室の先生方は、社交面また発達面においても、マイルスはクラスで最も優れている生徒の一人だと言われました。

「特別教室」の先生方が、年頭に私たちが食事療法を行うことに非常に疑心暗鬼であったとしても、卒業の時にはそうではありませんでした。先生方はマイルスの劇的な変化も見たし、うっかりプレッツェルやクッキーをマイルスに持たせた後の驚くべき悪化も見たからです。先生の一人は、今まで自閉症児を克服した子供を見た事がなかったと言いました。そして、自閉症の子供さんを持つ親御さんたちにこの食事療法をやるように必ずいうわ、と。

別の先生は、生徒をもって20年になりますが、食事療法を拒否する親の子供たちを扱うことは望まないと言いました。コーンのような問題を引き起こす食べ物をマイルスが口にしたときには、その先生は言われなくてもいつもそれを見分け、マイルスとの授業を「全く時間の無駄」と良く言っていました。その先生は、2人の生徒、つまりマイルス

と同じような道をたどったボビーという年下の男の子によって、回復のための全く新しい道をたどったのでした。

週に2日通っていた通常の保育園は、マイルスの成長を見る良い指標でした。マイルスは、他の子供たちからとても好かれ、その子供たちはマイルスがすることを真似るのが好きでした。保育園には「標準的」な子供たちがいて、私がクラスでの助手の当番の日には、マイルスがうまく適応しているのを見るのが嬉しかったです。先生は、マイルスがクラスでの決まりや日課に良く順応していると言ってくれました。そして、マイルスを迎えにいった時に私が不安そうに「今日はどうでしたか？」などと聞くことに驚かれました。

一般的に自閉症にはトイレのしつけの遅れが伴うため、トイレのしつけには時間がかかるだろうと予測していました。しかし、ある日トイレを流す音を耳にし、マイルスが乾いたおむつを片手にトイレから出てくるのをみて驚きました。数日後には、張り切って私をトイレに連れて行き始めての便を指差しました。後で、リビングルームへと歩きながら、マイルスは私の手を取り、「ママ、ぼくえらいねー！」と言いました。

3歳半のとき、マイルスは記憶が入れ替わったのか、他の誰かの人生の映画を見ているかのように、以前とは全く違う子供になりました。マイルスは、愛嬌があり、愛情に満ち、わんぱくな笑顔とすばらしい想像力を持った情熱的な子供になりました。家族をとっても愛し、すぐに新しいお友達を作り、泳いだり、絵を描いたりする事が好きで、自分で洋服を選んでおしゃれをする事を望みました。自分の言いたいことをちゃんと言い、ちょっとしたユーモアのセンスもありました。

信じがたい過去を思い出させるのは、マイルスの食事制限だけでした。もうおもしろい心配はなかったので、少し新しい食べ物に挑戦してみましたが、赤ちゃんの時に反応のあった食べ物ではまだ問題がありました。胃痛や下痢は常で、時折頭痛や睡眠障害がありました。マイルスの食事の幅を広げるためにEPD（酵素強化減感作薬）の注射を進めてくれる人たちもいましたが、私たちはマイルスがもう少し大きくなるまで待つことにしました。

マイルスは今、全く問題なく普通の学校に通っています。何を食べられるのかちゃんと自分で理解して、周りの人たちの食べ物に触れないように気をつけています。私が食べ慣れないものを与えると「これ食べても大丈夫？」と聞きます。マイルスは陽気で、「やったー！フライドポテト！」と言って、その週にすでに4回目のフライドポテトではないように振舞います。マイルスはこれから二度とカゼインやグルテンを摂る事は出来ないであろう、また食事は現在と同様に常に制限されるだろうという事実を私たちは受け入れま

した。しかし、マイルスは十分なたんぱく質と炭水化物を摂っていますし、ビタミン、ミネラル、カルシウム、必須アミノ酸のサプリメントも摂取していて、彼の体が正常に機能している事を考えれば、これはたいしたことではありません。

私は幸運な親である事を自覚しています。「振り返ってみると」という言葉で文章を始めると、「あんなふうに早くに診断してもらったのは良かった」とか、「インターネットに感謝」という思いでその文章を終わる事が出来ます。早期の介入が息子にとって重要な鍵でした。症状に対する単なる治療ではなく、免疫系に対してと、問題の原因への対処です。マイルスは幼かったので、一生涯障害を引き起こすような永久的な神経系の損傷を被りませんでした。

マイルスのように他の子供たちも食事療法に反応するのでしょうか？もちろんそうは思って居ません。過去2年間で、他に3人しか知りませんし、3人とも3歳未満の子供でした。でも、つまり、私の街に済んでいる4人の子供はもう自閉症ではありませんし、病んでもいません。またこの食事療法により、親の予想以上に体の機能がとても改善された年上の子供たちもたくさん見てきました。これは、私にとっては多額のお金がかかる特別教育と同じくらいの価値があります。

私が保護者の方に言えることは、最初に原因を見つけ、それから症状の治療をすることです。子供の免疫系を強化する事が可能であるならば、できるだけ早くそれを見つけ出し、体内の機能回復を計るべきです。グルテンとカゼイン除去食、ビタミン B6、MCT オイル（中鎖トリグリセリド）、DMG(ジメルグリシン)、必須脂肪酸などは試してみるのに安全です。ちゃんと検査をし、酵母菌や嫌気性細菌の治療も行ってください。それらは自閉症児でよく見られ、他の問題を起こしている可能性もあるからです。年齢は関係ありません。ドナ・ウィリアムスは、彼女が20代になるまで自閉症に対する食事療法を知らなかったですが、これを行うことによって不安が非常に軽減され、体の機能や人と関わる能力が改善されました。

自閉症の子供に会って、おそらくマイルスと同じように牛乳をほしがるとは思いますが、その両親が食事療法を試したくないと言う時、とてもつらい思いをしていました。私は、彼らに食事療法について一生懸命に説明したのですが、最終的には、人と言うのは覚悟が出来ていない限り新しい事を始めないのだという事がわかりました。残念なことに、発達中の脳が常に寛大であるということではなく、特定の行動は発達の段階で習得されることになっているのです。

ひどい下痢をする自閉症の子のために、私はその子の母親にグルテンを食事から取

り除くように懇願したこともありました。「お願いですから」という言葉を実際に使いました。それは心地のいいものではなく、彼女が「しません」と言った時には、私はとても気持ち悪い思いをしました。

2年後、共通の知人から彼女の子供が「成長障害」と診断され、それから食事療法を始めて素晴らしい効果があった事を耳にしました。彼女がどんなに不愉快な思いをしたか想像してみました。食事療法に関する情報がないのも問題ですが、情報があるのに未知の世界に対する恐れや不安からそれに挑戦しない事も問題です。